

# 大学生における衝動性が意欲低下および適応感に及ぼす影響に関する研究

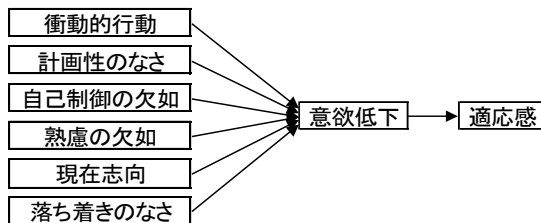
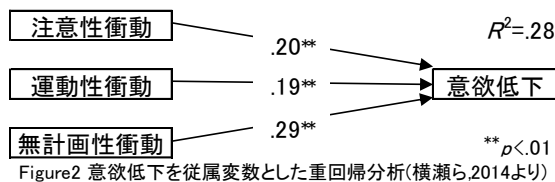
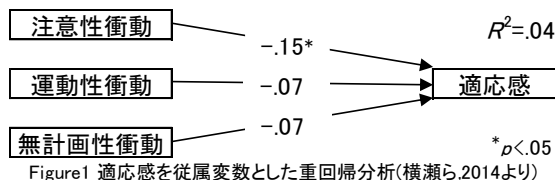
中尾 花奈子 (指導教員: 中村 真教授)

キーワード: 衝動性、適応感、意欲低下

## 問題・目的

横瀬・武田・境(2014)は大学生(健常群)を対象に衝動性と適応感、意欲低下との関連を検討した。相関分析の結果、衝動性と意欲低下の間に正の相関があること、衝動性と適応感の間および意欲低下と適応感の間に負の相関があることが示された。さらに、衝動性の各因子(注意性衝動、運動性衝動、無計画性衝動)を独立変数、適応感を従属変数とする重回帰分析を行った結果、「注意性衝動」のみが適応感に影響を与えていることが示された(Figure1)。また、意欲低下を従属変数として同様の分析を行った結果、全ての因子が意欲低下に影響を与えていることが認められた(Figure2)。

横瀬ら(2014)の研究では、衝動性が適応感に及ぼす影響と、衝動性が意欲低下に及ぼす影響の2つに分けて重回帰分析が行われ、その結果に基づいて衝動性は意欲低下に大きく影響を与えるが、適応感に与える影響は限定的であると結論付けられている。しかし、相関分析では、意欲低下と適応感の間にも有意な負の相関が認められており、横瀬ら(2014)の重回帰モデルには論理的な矛盾があるといえる。加えて、衝動的な振る舞いや行動は焦燥感(苛立ちや焦り)などのネガティブな感情を伴いやすく、後悔やモラルの低下(意欲の低下)を導くだろう。意欲が低下すると職場や学校などの社会環境にうまく適応できなくなると考えられる。これらをふまえて、本研究では、衝動性が意欲低下を介して適応感の低さに影響を及ぼすという新たなモデルを考案し、その妥当性を検討する(Figure3)。なお、横瀬ら(2014)の研究で使用された衝動性尺度 BIS-11(Someya et al., 2001)の下位因子は3つであったが、その後、小橋・井田(2013)が改訂した日本語版 BIS-11(6因子全30項目)を採用することにした。



## 方法

### 調査日時・対象者

2018年6月7日の社会心理学と6月8日の人間関係の心

理学の講義中に実施した。対象者はそれらの受講者224名(男性131名、女性93名、平均年齢18.9±.92歳)であった。

### 質問紙の概要

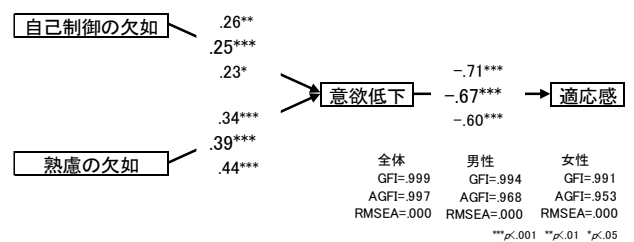
①フェイスシート ②改訂日本語版 BIS-11(小橋・井田, 2013) 全30項目のうち、大学生に尋ねるのにふさわしくない1項目を除外した29項目(6件法)で構成されている。③意欲低下領域尺度(下山, 1995) 全15項目(5件法)で構成されている。④青年用適応感尺度(大久保, 2005) 全30項目(5件法)で構成されている。

## 結果

改訂日本語版 BIS-11は、「衝動的行動( $\alpha=.77$ )」「計画性のなさ( $\alpha=.55$ )」「自己制御の欠如( $\alpha=.56$ )」「熟慮の欠如( $\alpha=.62$ )」「現在志向( $\alpha=.24$ )」「落ち着きのなさ( $\alpha=.25$ )」の6因子構造であるが、信頼性係数が著しく低い2つの因子を以降の分析から除外した(4因子全21項目における $\alpha=.80$ )。また、意欲低下領域尺度( $\alpha=.80$ )、青年用適応感尺度( $\alpha=.95$ )は信頼性が確認されたのでそのまま用いた。

「衝動性」、「意欲低下」、「適応感」について、1つの変数を制御したうえで他の2つの変数のあいだの偏相関係数を全ての組み合わせで算出した。その結果、3つの変数の間には「衝動性(の高さ) → 「意欲低下」 → 「適応感(の低さ)」という因果関係が存在する可能性が示された。

以上をふまえて、衝動性が意欲低下を促し、意欲低下が適応感に負の影響をもたらすことを裏付ける因果モデルの検証をパス解析により探索的に行った。Figure4は最終的に得られたモデルである。適合度指標の値からデータに適合した結果が得られたと言える。標準化係数の正負と有意性をみると、男女に共通して「自己制御の欠如」および「熟慮の欠如」から「意欲低下」への正のパスがそれぞれ有意であった。また、「意欲低下」から「適応感」への負のパスが有意であった。



## 考察

本研究では、衝動性が意欲低下を介して適応感の低さに影響を及ぼすという新たなモデルを考案し、その妥当性を検討した。その結果、大学生男女ともに、「自己制御の欠如」および「熟慮の欠如」に特徴づけられる衝動性が、大学生活における意欲の低下を媒介して、適応感の低下を促すという想定した通りの因果関係が裏付けられたと言える(Figure4)。

本研究の結果は、衝動性が高まると意欲が低下し職場や学校などの社会環境にうまく適応できなくなるとを示唆するものである。したがって、衝動性を制御すること、すなわち、「衝動性(の高さ) → 「意欲低下」 → 「適応感(の低さ)」という因果関係の連鎖(負の連鎖)を断ち切るためにはどのような方法が有効なのかを検討することが今後の課題である。